枕草子

この草子、目に見え心に思ふことを

この草子、目に見え心に思ふことを、人やは見むとすると思ひて、つれづれなる里居のほどに、書き集めたるを、あいなう、人のために便なき言ひ過ぐしもしつべき所々もあれば、ようの隠しおきたりと思ひしを、心よりほかにこそ漏り出でにけれ。

宮の御前に、内の大臣の奉り給へりけるを、「これに何を書かまし、上の御前には、『史記』といふ文をなむ書かせ給へる。」などのたまはせしを、「枕にこそは侍らめ。」と申ししかば、「さは、得てよ。」とて賜はせたりしを、あやしきを、こよや何やと、つきせず多かる紙を書きつくさむとせしに、いとものおぼえぬことぞ多かるや。

おほかた、これは、世の中にをかしきこと、人のめでたしなど思ふべき名を選り出でて、歌などをも木・草・鳥・虫をも言ひ出だしたらばこそ、「思ふほどよりはわろし、心見えなり。」とそしられめ、ただ心ひとつに、おのづから思ふことを、戯れに書きつけたれば、物に立ちまじり、人並々なるべき耳をも聞くべきものかはと思ひしに、「恥づかしき。」なむどもぞ、見る人はし給ふなれば、いとあやしうぞあるや。げにそも理、人の憎むをよしと言ひ、ほむるをも悪しと言ふ人は、心のほどこそ推しはからるれ。ただ人に見えけむぞねたき。

左中将、まだ伊勢守と聞こえし時、里におはしたりしに、端の方なりし畳をさし出でしものは、この草子乗りて出でにけり。惑ひ取り入れしかど、やがて持ておはして、いと久しくありてぞ返りたりし。それよりありきそめたるなめり、とぞ本に。

（跋文）

【口語訳】

この草子は、目に見え心に思うことを、他人が見ようとするだろうか、いや見ようとしないだろうと思って、所在ない実家にいる間に書き集めていたのだが、あいにく、他人にとって不都合な言い過ぎをしてしまったに違いない所も多々あるので、うまく隠しておいたと思ったのだが、思いがけなく世間に流布してしまったよ。

中宮に、内の大臣（＝藤原伊周）が献上なさった紙を、「これに何を書こうかしら。帝は『史記』という書物をお書きになりました。」などと（中宮が）おっしゃられたのを、（私が）「枕でございましょう。」と申し上げたところ、「それならば、取りなさい。」とくださったのだが、つまらないことを、あれやこれやと、尽きることがない多くの紙を書き尽くそうとしたので、まったくわけのわからないことが多いことだよ。

だいたい、この草子は、世の中でおもしろいことや、人がすばらしいなどと思うに違いない名を選び出して、歌などでも木や草や鳥や虫のことでも言い出したのであるならば、（読者から）「思ったほどはよくない、心の底が見え透いている。」と非難されるだろうが、ただ自分一人の心で、自然に心に思うことを、戯れに書きつけているので、他の立派な書物と肩を並べて、世間並みであるに違いないという評判をも聞けるはずもないだろうと思っていたのに、「すばらしい。」などとも、（この草子を）見る人はおっしゃるようなので、たいそう不思議なことだよ。なるほどそれも道理で、人が憎むのをよいと言い、褒めるのを悪いと言う（私のような）人は、おのずから心の底が推しはかられるというものだ。ただ人に（この草子が）見られたというのがねたましいのだ。

左中将（＝源経房）が、まだ伊勢守と申し上げた時、（私の）実家にいらっしゃった時に、（部屋の）縁側の方にあった薄縁を差し出したところ、なんとこの草子が載って出て行ったのだった。慌てて取り入れたのだが、そのまま持っていらっしゃって、たいそう長く経ってから返ってきたのだった。その時から（この草子は）一人歩きをして流布し始めたようだ、ともとの本には書いてある。